

平成17年度公立大学協会図書館協議会研修会

平成17年8月18日（木）

講演②

地域貢献への取り組み～こどもたちを対象に スタンプラリーで情報調べ～

国立大学法人鹿児島大学附属図書館

館長 早川 勝光 氏

ただいま紹介いただきました鹿児島大学の早川と申します。紹介にもありましたように、平成16年、つまり昨年度から初めて図書館長になった人間です。素人図書館長でございます。素人図書館長であるということは、一生懸命勉強しなければならないということです。専門分野を勉強していると、自分がずっとやっている事柄というのは、陳腐ですべてわかっているような気になって、新しい変化をつい勉強し損なうところがあります。そういうときに素人の人たちの話を聞くと、ああ、こんなおもしろさが自分のやっていた分野にもあったのだという発見をすることがあります。異業種交流が10数年前から非常に活発に行われています。同業者同士は競争もありますし、秘密にしなければならない情報も多いのですが、異業種と一緒に交流すると、自分たちの会社について再発見ができるということがあるのでしょうか。私は素人図書館長ですので外で学んできた事柄を新鮮な思いを持って話します。このことが時には職員の人たちの仕事にも若干貢献できるかなという思いでやっております。今年は2年目になりましたから、一貫した方針なり指針を図書館としてつくらなければならないのですが、まだそこまではいっておりません。うちの情報管理課長とも相談しながら、そういう方向を打ち出そうと思っております。

今回、与えられたテーマはここにありますように、「こどもたちを対象にしたスタンプラリーで情報調べ」という副題がついています。この副題で90分のお話ができるかと大変悩みましたが、自分たちのやったことを話すことは、頑張ってくれた図書館の人たちの励みにもなると思ひまして厚かましくもお引き受けしました。

地域貢献の取り組みと申しますが、基本的にはこどもといっしょにスタンプラリーをしたにすぎ

ません。これは必ずしも地域貢献という方針をもって始めたことではなく思いつきで始めた事柄です。でも、図書館職員が非常に頑張ってくれて、大変おもしろいものをつくり上げてくれたことを感謝しています。

全体としては、今回の話をこの5つのタイトルで進めてまいります。

1、大学図書館を取り巻く環境。これは有川先生が最後の方で話された内容と重なりますが、私なりの見方でもってお話をさせていただきます。これは7月にでた審議会の中間まとめの内容に従います。有川先生は、その委員の一人でしたから、詳しい背景もご存じでしょう。私は、それを読んで勉強をした次第です。先日、名古屋大学で国立大学の図書館協会総会がありまして、文部科学省の人がかいつまんで説明してくれた内容も取り入れて話します。

2番目に鹿児島大学の附属図書館の地域連携活動についてお話しします。「こども見学デー」もその一つですが、そればかりではなくて、他に幾つかのことも試みている状態です。3番目に「こども見学デー」とは、どんなものなのかということに触れて、4番目に、今回与えられたテーマであります「スタンプラリー：大学図書館ってどんなところ？」を取り上げ、最後に報告書の作成についてお話ししていきます。その後、今年はどうなことを考えているのか（実は、明日それをするようになっております）をつけ加えさせていただきます。

1. 大学図書館を取り巻く環境

最初に、大学図書館を取り巻く環境ということですが、まず、文部科学省の白書で図書館と関係していると思われるところを見ますと、第6章の研究開発の戦略的重点化という中のトピック2で「教育、文化、芸術分野におけるデジタルアーカイブ化に必要なソフトウェアの研究開発の推進」ということを言っています。その中に「知的資産の電子的な保存・活用等（デジタル・アーカイブ化）に必要なソフトウェア技術基盤の構築のため」の研究開発に、文部科学省はこれから力を入れていくと言っていると思います。

それは図書館にいる人たちから見たら、当たり前のことかもしれませんが。これは始めることは簡単ですが、実際の作業は、非常に地道な、あるいは目立たない形の仕事になります。そこで政府の期待する戦略的重点化を受けてこのようなデジタルアーカイブ化をうちの図書館もやっています、

つまり、大学の持っている知的資産のデジタルアーカイブ化として、最近流行になっているリポジトリへの取り組みを始めました。これは白書の内容と関係した意味でのアピールの点になると考えています。基本的には文部科学省の意向や情報をなるべく取りいれながら、政府にアピールするアイデアを考えていこうと思っているところです。

そこで、これは先ほどの有川先生のお話しと重なっていますが、科学技術・学術審議会の「中間まとめ」を説明いたします。「科学技術・学術審議会」の学術分科会の研究環境基盤部会、さらにその下に学術情報基盤作業部会があります。ここの下に3つのワーキンググループができて、その一つが大学図書館等ワーキンググループということになっております。その「中間まとめ」の内容について説明いたします。「大学図書館の現状」の中には3つのことが書いてあります。基本的役割、電子化の急速な進展、増大する負担の3つです。次に「取り巻く課題」、「緊急に対応が必要な事項」が述べられています。

まず、「基本的な役割」について中間まとめは次のように言っています。「大学図書館は高等教育と学術研究活動を支える、学術情報基盤で、大学の中核をなす施設である」と。鹿児島大学の場合に、そういう意識が本当に経営陣の中にあるのかと、若干は疑われる感じもあります。それは結局のところ、私が館長として十分その意思を伝えきれていないということでしょうが、この図書館部会でははっきりこういうふうに言います。

鹿児島大学の図書館長は、理事役員会のメンバーではありません。教育研究評議会のメンバーですが、役員会とのパイプは、図書館担当の理事を通して行われます。役員会の中でどんなふうに図書館の役割が議論されているのかわからない状態で苦しんでいるところです。又、担当理事も忙しいものですから、意思疎通が十分に行われていない点が鹿児島大学図書館の現在の問題とっております。

ちょっと話が逸れましたけれども、「図書館の基本的役割」の中で、「図書館は大学の中核をなす施設である」と記し、また、「大学図書館は、学術情報の収集、蓄積、組織化を行い、公開する」と書いてあります。収集、蓄積、そして、それを組織化するというのは従前の図書館が行ってきたことですが、それを「公開する」という点は比較的新しいことと考えます。所蔵図書を一般市民にも開放すれば、それも公開ということになるかもしれません。しかし、現在は、ITネットワーク

を通して積極的に発信・公開する点が必要になっています。例えば、先ほどの白書におけるデジタルアーカイブ化をしっかりとしろということと重なっていると思っています。

ですから、大学からの情報発信も図書館がきちんと担っていかないといけない。現在はいろいろな組織がそれぞれ大学の情報を発信していると思いますが、学術情報関係に関する限り図書館が中心になる、そういう図書館をつくるというのが、私自身の図書館についての見方になっております。その中で、機関リポジトリが準備段階にあります。

3番目に、「図書館の学術情報を活用して、大学は人材育成を行い、学生の自主学習、教育研究活動の活性化を図る」ということです。そのためには、学習用の資料をどれだけ図書館がそろえているかということだろうと思います。図書館がそろえることもさることながら、そのための経費を大学が措置することが評価されると思われれます。大学の予算措置が不十分で学習用図書が増えないとき、大学は大変厳しい評価を受けるだろうと大変恐れているところです。それは、図書館長の力量とは思ふものの経費の充実は非常に難しい時代になりまして、図書館経費は年々少なくなっています。

最後は、「教育研究支援が大学図書館の学術情報基盤としての基本的な役割である」ということです。図書館は基本的には大学の本来の任務である教育研究支援が役割です。これらの基本的役割を見る限り、地域貢献とか、地域連携というのは入っていないということです。これは大学図書館としての正しい見識だろうと私は思います。

しかし、図書館がこれらの任務をきちんと果たしていれば、地域にも貢献できるということです。何をするのでも知識、情報が必要となっている時代です。情報があることによっていろいろな仕事ができますし、情報が不足しないと事柄が頓挫してしまうことがあるわけです。地域活動においても、まず情報が第一だということになります。

それは例えて言えば、我々が活動するためには、まず、DNA情報を利用して必要な物質をつくる必要があります。DNA情報が生体にとって重要な役割を果たしているということと同じですから、情報の部分をきちんとやっていくことが一番重要なことだと思っております。

そして、大学図書館を取り巻く課題の方は、先ほどの有川先生のご講演で列挙されたと思います。まず、「財政基盤が不安定」であること。鹿児島大学の場合厳しい状況にあります。学習資料購入

経費は、共通経費枠に依存しますが急速に減額されています。九州大学は比較的早く電子ジャーナルの経費を共通経費化しておられたんですが、鹿児島大学は冊子体をとっている人たちにおんぶする形で、追加費用を電子ジャーナル経費として準備していました。研究費削減によって雑誌の購読中止が増大して多くの電子ジャーナルを契約解除する必要がありました。昨年度まではそういう形でした。

そこで、私が図書館長になって最初の仕事は、安定的に電子ジャーナルを供給することでした。各部局長を回って、予算配分に応じて部局が負担することを訴えて、今年から雑誌をとっている人たちに個別に依存するのではなくて、大学として部局が負担するという方針を立ててもらいました。鹿児島大学は理系の学部が大部分で、文系は法文学部という1学部しかないものですから、電子ジャーナル系の必要は理解を得やすかったという点はあるかもしれません。

2番目の「電子化への対応の遅れ」については、125万冊の蔵書の内、残念ながら、いまだにまだ5割程度しかカタログの電子化ができていません。今年も特別予算をつぎ込んで加速するようにはしておりますけれども、なかなか難しいです。ひとまずスキャナーで取り込んでいくというのも一つのアイデアではありますが、電子的なデータにするということの意味は、検索、アクセスを容易にする点にありますので、古い方の資料について加速することが急務だと考えています。

鹿児島大学でもそれぞれの教官が学術雑誌に論文を投稿して出版されています。つまり学内で多くの研究成果や教育用資料が生産されています。鹿児島大学でそれらにアクセスできないのは、今、大変問題になっております。これらの資料を機関リポジトリとしてそのデジタルデータを大学に保管し公開する、すなわち、投稿して発表した論文などを大学が公開することが許される時代になってきております。出版社によって若干の違いはありますが、大部分の出版社が許容しますので、学術雑誌掲載論文についても機関リポジトリに保存して大学の成果として公開することができます。論文の最終的な印刷体と同じものは許容されないとのことですが、そうでない校正が終わった最終原稿でしたら、所属機関が公開しても構わないということです。今そのテスト版を作り上げました。そういうことをこの2番目の流れの中でやっけていこうとしております。

3番目の「体系的な資料の収集、保存は困難」については、鹿児島大学の場合はまさに課題と言われているとおりです。特に、学習資料については、教官に「どういう本が必要ですか」と尋ねて、

その授業に関係する本という形で集めているものですから、体系的な整備は一切されていません。シリーズものはその分野を網羅しているわけですから、ある分野の関連情報は必ずあるということは学生でも分かります。でも、その一部が欠けていると役に立たないという場合が起こることになります。教官の場合には自分の学問分野、あるいは自分の教育との関係で数冊の本を挙げますのでシリーズの全巻が揃うことにはなりません。図書館で自分の専門とする化学分野の図書を見ますと、雑多なタイトルの学習書が並んでいます。基本的なシリーズになっているものを集めておけば、学生はいろいろな先生から多様な課題を与えられても、シリーズ本のどこかで探し得るのにと思いました。館長になって、改めて図書館の学習資料を眺めてみますと、十分ではないということを感じて、これも課題の中の一つだと思っております。

また、4番目のこの「目録所在サービス」については現在、国立情報学研究所がすべてまとめてやってくれていますから、大変便利になっている時代だと思えます。本であろうと、あるいは論文であろうと、所在情報を探し出せば図書館を通して借り出したり、あるいはコピーをもらったりすることができる時代になっています。書誌ファイルの入力には国立情報学研究所に協力することが大事だと思っています。ここでもいろいろ問題がありまして、九州大学は非常に負担が増えたとおっしゃっていました。謝絶率の高い図書館には依頼を差し控えて、これを忠実にやっている大学にはあちこちからコピーをくれとくるものですから、そういう仕事がうんと増えるという問題があります。また、書誌情報の品質の低下、雑誌の新規購読や購読中止などの情報入力の流れなどによってサービスに支障を来す品質低下が起こっているということです。これは謝絶率の増大をもたらします。

「取り巻く課題」の最後に、「図書館サービスの問題点」として、専門知識を持つ専任職員の減少があります。鹿児島大学図書館には、正規職員だけで30名はいないと思います。パートも全部入れて大体40名ぐらいと思いますが、その中には総務や財務のような人も入っていますので、図書館の専門知識を持つ者は限られています。実際に司書の資格を持っている人は20名程度ですけれども、そういう人たちも、専門知識のサブジェクト・ライブラリアンになれるかという、各主題について大学レベルの専門知識を必要としますので、そこまでの参考調査は不可能となります。これまでは図書館職員として、あるいは司書資格のある人たちが図書館に配置されていましたが、

大学の人事政策上、どこにでも配置できる人たちを採用する形になっています。新しい人たちには司書的な任務は全部図書館で教育していかなければなりません。

「中間まとめ」最後の「緊急に対応が必要な事項」の上の方は省略させていただきますが、その5番目の「地域社会との連携の推進」について考えます。先ほどの「基本的役割」から考えて、必要事項の5番目に挙げられているのは地域社会との連携はそれほど重要な図書館の任務ではないということでしょう。先ほどの基本的任務をきちんと果たしなさいよと。その副作用としてこういう地域社会にも十分貢献できますよということです。今回私が話す内容は図書館のオプション的な任務と考えられます。

2. 鹿児島大学附属図書館の地域連携

ここでは鹿児島大学附属図書館の地域連携について幾つか項目を挙げて説明します。

鹿児島県歴史資料センター「黎明館」とお互いに連携するという包括協定を結びました。具体的には、黎明館が奄美地区にある資料、特に江戸時代の資料を3年間かけて調査しました。それをデジタル化データとしてとりたいという相談を受けまして、鹿児島大学の附属図書館が協力することになりました。昨年その話がもちこまれて、今年から始めます。学長裁量経費をいただいて始めることになりました。ただそれだけで終わるのではなく、今後可能な協力事業を行っていくことになっています。もう少し一般的に、地域の文化・教育及び学術の発展を促進するという共通目的のもとに、共同事業の推進、学術情報及び資料の交換、展示会や講演会での相互協力、その他をやるうとしております。

大学の事情としては、図書館の人員を縮減していかなければならないのに、地域貢献を別個のこととして実行する力はありません。そこで類似組織双方が協力することによって少ない労力負担で地域貢献の実をとる、必ずしも独自でやらなくてもよかろうということです。これまでは、大学の先生個人では黎明館に協力して、資料の収集や整理、その相談や勉強会をしていました。これを教官個人のことではなくて、大学図書館が窓口となって、大学の事業として行う方式への移行ということになります。

うちには「玉里文庫」という貴重な資料がありますので、この貴重な資料の公開事業を平成11

年から続けています。これは、現教育学部長の中山先生が図書館長のときに始まって、昨年で第6回になりました。平成16年度は「絵本を旅する」と題して鹿児島大学附属図書館と出水市で展示と講演会を行いました。この事業の重要な点は、図書館内で行うだけでなく、必ず市外でも行う点です。図書館にとっては準備などの仕事の負担は重いですが、鹿児島大学の図書館の存在を地方の人々にも知っていただくことにあります。

それから、教育支援と関係してサイエンス・パートナーシップ・プログラム（SPP）で図書館を利用することに協力しています。SPPというのは、文部科学省が子どもたちの理科離れ対策として始めている事業です。高校との連携プログラムとして、大学から講師を派遣するとか、高校の先生たちを招いて講習会をするとか、高校生を招待して先端研究に触れるとかします。そのための予算が付きます。これは、私自身が一教官として応募して採用されたものです。高校生を対象にした化学系の実験を指導します。図書館長になったものですから、図書館の地域貢献項目に加えるために図書館を引きずり込みました。実験して楽しんだあと、高校生たちは図書館で情報検索して内容を深め、パワーポイントを使って発表資料をつくるということを行いました。図書館には学習資料はたくさんありますから、実験内容を検索するのに大変便利です。これは、後ほど説明する「こども見学デー」の高校生版と言っていいかもしれません。これは特定の高校の授業と連携して行うプログラムです。今年は、8月8・9日の2日間にわたって図書館を使用しました。又、中学生の職場体験実習の依頼がありましたので受け入れました。

これらは初中等教育の支援であるとともに地域貢献とも重なっています。鹿児島大学附属図書館は、教育支援で一番重要なのは学習資料をそろえることだと思いますが、SPPや職場体験実習も図書館職員の専門的な知識が生かせるということで協力しています。今年の4月から情報リテラシー支援室というのをつくりました。これは館長裁量でつくったものですから、フォーマルな事務組織ではありませんが、各係の仕事と併任で主として司書資格を持った人たちを集めました。そして今までやっていたインターンシップや実習などの教育的な仕事を情報リテラシー支援室の仕事としてまとめることにしました。

情報リテラシー支援室の業務は、教育支援です。その仕事は、ここに記していますように図書館ツアー、蔵書検索法の講習会、文献検索法の講習会、レポート作成支援など、従来行ってきたもの

を支援室にまとめました。新しい仕事としては、情報リテラシーのテキストづくりをしております。東北大学が非常に素晴らしい冊子をつくられました。東大のものはコンパクトな親しみやすいものです。鹿児島大学は、もう少し基礎的なことをまとめようとして作成を始めています。どんなデータベースがあって、どんな電子ジャーナル組織があって、どういうものがメインになっているか、又、どの分野のものは主としてどういう電子ジャーナルを当たったらいいかなどの資料も整備してまとめた冊子をつくらうと思っています。そして、必修科目の情報活用のリテラシー教育でその冊子を使ってもらおうと考えて、テキストづくりをやっています。多分、今年中にはでき上がると思います。また、でき上がりましたら、欲しい人には送りたいと思います。

講習、講演会もこれまでずっとやってきたことですが、情報リテラシー支援室に全部まとめました。司書教諭の講習、図書館協議会の講演会及び研修会の実施、研修実習生の受け入れなど、これまではそれぞれの担当係が異なっていました。情報リテラシー支援室にまとめることによって学内の役員会にも、図書館の教育に対する貢献をわかりやすくする効果があります。

3. 霞ヶ関こども見学デー

それで、いよいよ与えられた課題の「こども見学デー」についてお話しします。これは今年の文部科学省のポスターです。「夏休みこども見学デー」を8月24、25日にすることになっております。ここに趣旨を書いています。「『こども霞ヶ関見学デー』は文部科学省をはじめとした府省庁等が連携して、業務説明や省内見学などを行うことにより親子の触れ合いを深め、こどもたちが夏休みに広く社会を知る体験活動の機会とするとともに、あわせて府省庁等の施策に対する理解の増進を図ることを目的に行います」ということです。

昨年、この案内が学内で回覧されたとき、こどもたちに親の職場を見てもらうものという軽い気持ちで、職員に提案しました。だから、1人が説明について、普段の仕事を見てもらおうと。大学図書館って、こどもたちには結構興味があると私自身思いましたから。こどもたちが知っている図書館は、学校図書室であり、あるいは市立図書館であり、本が並べてあって見るのが中心になっていると思います。大学図書館では、地下にある書庫には棚が並んでいるだけです。それは電動書庫ですから、そういう形になっています。市立図書館ではそういうものは見えないところであるんで

すけれども、大学図書館でそれを見せるだけでも違いを感じられます。また、コンピューターを使うということもあります。あるいは、大学図書館の仕事としては、カタログづくりも必要ですし、そういう仕事を見せたら、いろんな仕事があることを体験させられます。見せるだけだったら図書館職員にとって余り負担にならないから、こんなのをやってみたらどうかという素案を話しました。そうしたら、職員の人たちは専門家ですから、恥ずかしいものにはできないということになりました。本格的に取り組んだわけです。

文部科学省は、去年の段階では「大臣と話そう」、「省内見学&体験・展示コーナー」「夏休み子ども映画フェア」と、この3つしかやっていません。ところが、今年は、文部科学省がまず24日だけで3つの部局が4つのプログラムをやりますし、25日になりますと、さらに増えて7つのプログラムを計画しております。つまり、この1年間の変化を見ますと、これは結構力を入れているということを改めて思いました。ほかの組織が余り知らないうちに、さっき有川先生は最初が肝心とおっしゃいましたが、早目に取り組んだのはよかったと思っております。

去年は8月25、26日だったのですが、同時間催されたところのリストを見ますと、九州・沖縄では唯一鹿児島大学が行うということで宣伝になったわけです。ですから、最初に取り組む、しかも、本省のページの中でも取り上げられることを行うということが重要なことと考えます。国立大学が法人化されたとはいえ、やっぱり政府や文部科学省の意向を大切にしないとさまざまな申請が通りません。この取り組みは本省に少し訴える機会になったかと思っております。

4. スタンプラリー：大学図書館ってどんなところ？

先ほど、うちの職員がきちんと考えてくれたと言いました。私自身は、ただ子どもたちに職場を見せるだけでいいという軽い気持ちでいましたが、職員は非常にきちんとした仕事をしてくれました。まず、この4つの項を位置づけました。必ずしもこういう順番ですべての計画を立てたわけではないのですが、一つは地域貢献という展開を考えました。今はどこでも夏休み中に、子ども向けのプログラムをいろいろな組織がやっています、こどもの奪い合いになっているかもしれません。私のこどものころは、そんなことはなかった時代でしたけれども、今は本当にたくさんあります。ですから、親もそういう情報を調べてから、こどもに勉強させられます。しかも、学校の勉強とは

違って、興味ある形でさせてもらえる機会がいっぱいあります。そのような多数の子ども向けプログラムに割り込んだにすぎないと言えます。夏休み中は、こどもたちにはたっぷりとした時間がありますので、このプログラムに参加したこどもたちが満足感を覚えることができれば、地域貢献ということになります。

教育貢献という点では、現在のこどもたちは、学校でコンピューターを使いますし、自宅にも持っているこどもがいっぱいいます。ですから、ヤフーとかグーグルとか、コンピューターを使った情報探しを経験しております。しかし、ヤフーやグーグルによる情報探しでは、得られた情報はまさに玉石混交、素晴らしい情報もあれば、そうでないものもあります。自分が探していたのとは全然違うものも出てきます。ですから、キーワードをいかに上手につくるか、さもないと目的の情報を得られません。情報探しの訓練になったらいいかなと考えました。主として学習情報という観点、そういう体験をしておくのは、将来に役立つことではないかなと思います。

大学図書館側から見たら、こどもたちに図書館職員の専門性を生かしたような貢献ができたらいいと思います。図書館司書の人たちがもっている非常に大きな能力は情報検索部分だろうと思いますし、ある情報を得たいときにはどんな本が適切かというのを教える（参考調査）ことと思いますので、そういう位置づけでも取り組みました。

鹿児島大学は「アエラ効果」によって、中央図書館を立派な建物にしてもらいました。今から10年ほど前、「アエラ」という雑誌の中で鹿児島大学の図書館がいかにみすばらしいかということが記事になりました。そうしたら、文部科学省が慌てまして大変立派なのをつくってくれました。全く新しい土地に建設できればよかったのですが、ひとまず映画のセットみたいな入り口に相当する部分だけをつくって、古い図書館資料を移してから後ろの方をつくるということで、数年計画になりました。現在は大変すばらしい、一番上まで吹き抜けのあるすばらしい図書館になっております。鹿児島大学の建物の中では、一番いい学術的な環境になっているだろうと思っております。そういう大学の素晴らしいところをこどもたちに見せておくのは決して悪くはありません。最近、公立図書館が非常に立派なのをつくりますから、大学図書館の建物はそれほど先進性はありませんが、鹿児島大学附属図書館の建物はよく考えられています。法人化されてからは、きれいな国立大学図書館を建設するのは大変難しいと思っております。

このような4つの位置づけをしまして、こどもたちが楽しみながら取り組めるものということで、スタンプラリーを考え出しました。スタンプラリーの中身は、図書館資料を利用した情報探しを競争的にさせること。それぞれ成功した人にはスタンプを押してあげるということです。遊びの感覚を取り入れました。

それをやるに当たっては、いろいろな準備が必要です。まず広報としてはホームページに流す。それからパンフレットをつくって、それを近くの小学校に配布する。新聞に載せてもらう。ラジオで流してもらう。テレビというのは見ている時間でないとだめですが、ラジオというのは、自動車に乗っている人たちには結構宣伝になるということで、ラジオも今は無視できない広告と考えました。また、南日本新聞のイベント情報に載せてもらう。このような広報を計画し、実際に取り組みました。

対象については、本省の趣旨にもありますように、親子でということが重要ですから、家族単位で行う、つまり、家族単位でチームを組んで、親子の触れ合いをなるべく多くするような機会にしようと考えました。そのために、いろいろな役割を割り当てました。

ここに高精細図デモと書いてありますが、玉里文庫の資料の一部を高精細図の形にしてあります。特に、地図資料のようなものが非常に有用ですけれども、それをどんなに拡大していてもきれいに見えるというようなことを、G I Fデータの拡大と比較してデモしました。

これは昨年度のプログラムです。最初のところはスタンプラリー、どんなものか説明します。そして、図書館内を案内します。地上5階地下2階です。5階にオフィスと玉里文庫という貴重資料を置いてあります。かつ、そこにAVホールといって、オーディオビジュアルホールもあります。子どもたちはAVホールに集合、そこで説明しますので、5階から始めて順に下へおりていって、図書館の全体を案内しました。これは、平常に行っている図書館ツアーに相当することをこどもたち向けにしたということになります。

それから、スタンプラリーをしまして、休憩した後、高精細画像のデモンストレーション。そして、こどもたちにどんなだったかというインタビューをして終わりました。

文部科学省に提出した最初の案内では、100名ぐらいで2日間にわたって行くと書いていました。今から思えば「幸いにして」ですけれども、応募は30名ぐらいと多くなかったものですから、1日

にまとめることができました。多くの時間をとるのは図書館職員にとって大変です。これだけのプログラムを行うのは結構な負担になりますから、応募者が少なかったのが幸いでした。他の「見学デー」プログラムは20名とか50名とかで、100名なんて数字を出しているところはありませんでした。応募者が少なかったので、参加者には結構喜んでもらうのができたと思います。

では、スタンプラリーとは一体どんなものかということですが、まず、ポイントをためて、チーム対抗にする。図書館の資料を使う体験をする。解答をそれぞれのポイントで探す。ラリーですから、図書館のいろんなところを探し回ってもらおうということを考えました。それをチェックポイントと呼びます。正解かどうかのチェックは1階の参考調査カウンターにおいて、そこで正しい答えにスタンプを押してもらいます。スタンプを5つためるとおしまいです。

もう少し細かく言いますと、まず1階のカウンターでラリーがスタートします。出題者から1枚に記した問題を受け取ります。各ポイント当たり全部で10問ぐらい作成しました。各チェックポイントへ移動して、資料を調べて解答を出します。そして、1階カウンターでチェックしてもらい、そこで正解だったらスタンプをもらう。正解でなければもう一度チェックポイントへ行って調べる。正解に到達したらスタンプをもらって、また新しく問題ももらって、別のチェックポイントで調べる。これを5回繰り返します。…問題をもらうのと同じです。問題を完全に終わったら、AVホールへ行って全員が帰るまで待機します。

どんなチェックポイントをつくったかをここに示します。図書館はいろいろな資料が各階にありますので、それぞれを使用するようにしました。チェックポイント1の地階ではグラビア雑誌を使用しました。チェックポイント2では1階にあるDLSコーナーでマルチメディア図鑑を、チェックポイント3（2階）では鹿児島の名について郷土資料を、チェックポイント4（3階）では歴史や文化についての関連資料を、チェックポイント5では（4階）インターネットを使って解く問題を調べました。チェックポイント5では研究者談話室にコンピューターを準備して、こどもたちがアクセスするようにしました。学習中の学生利用者を邪魔しないように、書棚から資料を取り出したあとは、関連資料を各階のグループ学習室もって行って親子で調べるようにしました。ここに使用したスタンプラリーのスタンプ帳の表紙を示します。

参考までに各チェックポイントの問題例を紹介します。最初の雑誌を探す問題、例えば、こんな

問題を調べました。「恐竜の知能と同じくらいの知能をもつ動物は？」これは、覚えている知識を使うことではなくて調べるということが目的ですから、ヒントの中に「『ニュートン』の別冊を見てください」と記して、自分で探させます。必ず図書館資料を調べるようにヒントを与えておきました。各チェックポイントには図書館職員が、困っている子ども、あるいは家族の相談にのることにしました。

2題目はこんな質問です。「今からおよそ5億年前の時代は、カンブリア紀と呼ばれています。このころの地球にはカンブリアモンスターと呼ばれる奇妙な生き物が栄えていました。下の生き物の名前について調べてください」ということですが、これについてはマルチメディア館の中の「生命～40億年のはるかな旅」のCDを使って調べます。これもマルチメディア資料を使って調べます。

新幹線が開通して鹿児島中央駅となりました。その前は西鹿児島駅と言っていました。そこで「『西駅』と呼ばれ親しまれてきた『西鹿児島駅』は新幹線の開通とともに『鹿児島中央駅』と改めました。それでは『西鹿児島駅』の前には何駅と呼ばれていたのでしょうか？」という問題を作成しました。ヒントには「大正時代の鹿児島市内地図で調べてみましょう」と。そういう古い地図は、図書館にありますので、そういうものを調べたらわかりますよというヒントを与えます。

鹿児島の歴史文化についても、「大隅地方にある岩川八幡宮で行われる秋の収穫祭の『弥五郎どん祭り』はその人形の巨大さで全国的にも知られています。実はこの岩川の弥五郎どんには兄弟がいて、弥五郎三兄弟とも呼ばれています。宮崎県山之口、宮崎県鉄肥、鹿児島県岩川の三兄弟です。それでは鹿児島県岩川の弥五郎どんは長男、次男、三男のどれでしょうか」と。私も初耳ですが、図書館の司書はさすがだと改めて感心いたしました。彼らも、必ず調べないと出てこないような問題を一生懸命考えてくれたんだと思います。ここでのヒントとしては、「民俗関連について書かれた本を見てみましょう」、そこにその答えが書いてあると。この2つは鹿児島に関係したことです。

インターネットで調べる問題では、「一番人口の多いのは中国の約13億人、それでは世界で一番人口の少ない国の人口は何人でしょう」と尋ねました。ヒントは「外務省の『ワールドジャンプ（キッズ外務省）』では世界の国についていろんなことを調べることができます。ヤフーキッズで調べましょう」です。ヤフーキッズでは、結構おもしろい情報が得られます。

5. 報告書

最後に、イベントを実行したときに非常に重要なのは、報告書をつくるということだと、私は認識しております。

私は、大学の管理運営的な仕事は一度もしたことのない人間でしたが、学長補佐を命じられました。それは、鹿児島大学で初めてFDを世話した人間だったためと思われます。FD、ファカルティ・ディベロプメントというのは、今では当たり前のことで、どの大学でも行われていますけれども、5年前には鹿児島大学で全学的に実行することは困難でした。教養部が廃止されて共通教育委員長はその必要を認識していたのですが、いろんな批判があつたりして実行できなかったようです。私が大学セミナーハウスの研修に参加したとき、これから先、学生による授業評価やFDは非常に重要なことになるという感じを持ちました。共通教育委員になったとき委員長にそのことを伝え共通教育でFDを実施する責任者となりました。その実績によってFD担当の学長補佐を命じられるハメになってしまいました。

その最初のFDで北海道大学の阿部和厚教授の指導を受けてワークショップを行いました。北海道大学ではFDごとに非常に分厚い報告書の冊子をつくっておられます。そういう分厚な報告書をつくるのは原稿集めが大変です。阿部先生が教えてくださったのは、活動のために作成する資料がいっぱいできます。ワークショップの間にも、プロダクトという資料を作成します。2日間の合宿、訓練の中で使う資料を全部集めて、報告書をつくり上げています。それは、まさにプログラムで行ったすべてをあらわすものですから、大変便利なものです。イベント終了後に改めて報告書のための原稿を依頼しても締切りに間に合うことは少ないのではないのでしょうか。皆さんも、大学の先生に原稿を依頼してもなかなか原稿が来ないということで悩まれたことがあることと思います。私も遅い一人で、原稿が遅れがちで、図書館職員に迷惑をかけていますけれども、改めて書くというのは結構大変です。ですから、先ほどのような準備と実施段階で作成された資料をあつめて一つの報告書にしてしまつたらいいのと思います。

そこでこのような手製の報告書をつくりました。今後このイベントを継続する場合の参考資料としてごく小さな冊子を作成しました。最初は報告書的な簡単なまとめ、あとは準備と実行のときに使った資料をまとめています。また、写真も入れました。この冊子は学内的な報告に有益ですし、

文部科学省への資料提出にも結構アピールできます。口頭で報告しても印象に残りませんが、こういう冊子を配布すると印象に残ります。こんなことをしましたと言って冊子を渡すのは、宣伝の上で大変大きな効果をもたらします。ですから、何かイベントを行ったときには必ず形に残るように、報告書をつくっておかれるといいと思います。

北大のFDは、かなり分厚い冊子をつくっておられます。分厚いと印刷経費もかかるし、今の少ない予算では経済的に大変です。こういう手製のコンパクトな冊子であれば、資料の送付や持参、また増刷が容易ですので、大変便利に使っております。こういう報告用の小冊子をつくるということは、いろいろな意味で便利でありますし、改めて報告書用の原稿を書いてくださいと頼まなくていいわけです。責任者は、最終的なまとめを書く必要がありますが、実施のときに使った資料をどんどんとじ込んでいく形であれば十分だと私は思います。配布できる資料が残りますし、外部への宣伝の効果もあります。また、この年にはこういうことが始まったという図書館の歴史資料にもなります。各種のイベントについていつもこういう冊子にまとめていくということは重要だと思います。

先ほど、情報リテラシー支援室をつくった話をしたんですが、そこでやる内容は実はこれまでずっとやっていたことです。私自身は図書館長になってみて初めて、図書館ってこんなにいろんな教育関係のことをやっていることを知りました。ところが、それぞれ担当係が違いますし、ある意味では個人的に受けるような形の部分もあって、図書館としての活動としてアピールしていなかった、つまりそれが見えるものになっていなかったんです。今回、情報リテラシー支援室で、それらを教育支援として行っていることをまとめてみると、図書館こんなに教育支援してますよと訴えられるような資料になります。学習図書をどれだけ買ったかというようなデータだけではなかなか図書館の教育支援を訴えることはできないのですけれども、教育支援関係をまとめて冊子にすると宣伝効果が大きくなります。

ということで、前置きが長くなってしまいましたけれども、報告書はこんなふうにつくりました。最初のあたりは本省から資金を得たプログラム、たとえば、先ほどお話ししたS P Pの報告書に相当するごく簡単な実施概要です。「大学に地域貢献や地域への公開が求められている今、知の宝庫である大学図書館も広く市民に利用され、大学が所蔵する知的財産が活用されるのは望ましいこと

である。本プログラムは、政府の各省庁が行う『子ども霞が関見学デー』と同時間催し、共通の趣旨のもとに企画されたものである」と。こういうことも意識しながらやっていますということです。

新しいプログラム、個性輝く、魅力的などこでもやっていない脚光を浴びるようなプログラムというのは、そう簡単ではありませんし、金がかかることが多いと思います。我々がやっていることをアピールできるのは、本省が企画して募集するものだと思います。管理職の人たちはだれでも経験することだと思いますけれども、あることをやってみたいと思っても、実際に動いてくれる人がいないとできわけです。政府は、自分が手足を動かして実行するわけではないものですから、政府の企画に応募してくれるところが自分の管轄にたくさんあれば、本省として悪い気がしないと思われれます。したがって、政府の企画募集にはこたえられる限りこたえていこうというのが、先ほどお話ししたサイエンス・パートナーシップ・プログラムですし、この『子ども霞が関見学デー』です。そうすると、本省自身が、宣伝の中に加えてくれるようになる、つまり日本全国に発信できる情報になるということです。

そんな理由で、私は『子ども霞が関見学デー』の案内を回覧の中で見たときに、やってみようかと思いました。こういうのに応えておいたら政府は悪い印象を持つことはないだろうと。宣伝になるとは思っていなかったんですが、軽くできそうな政府の募集にはとにかくこたえようとしたわけです。一生懸命努力しても全然報われないではかわいそうですし、それほど負担しなくても報われるのが一番望ましいです。努力したらそれなりに報われるようにした方がいいというのが私の発想でありまして、こういう政府が行うものには乗っかっていこうとしたということです。自分自身ではなかなか新しいアイデアが出るような人間ではないですから、こういうことで点数を稼ごうとしたと、そんな言い方もできるかもしれません。

でも、政府からも報告書を求められたりしたものですから、職員たちは実施してよかったと思っています。やってよかった点として、大学図書館の仕事を理解できるようにするとともに、参加者が楽しめるようにスタンプラリーにしたこと、そして、図書館資料を調べることによって解答できる問題を作成し、その資料が存在する図書館の各所を案内できたこと、各ポイントでは図書館司書である職員が情報検索の相談にのったこと などです。図書館職員の仕事をごどもたちに知らせることになったと思います。

もう一つ気をつけた点は、図書館には本来の利用者がいるわけですから、利用者を余りディスターブするわけにはいきません。例えば、子どもたちが雑誌を探すときも、一斉に全部のチームが同じポイントに行ったりすると、その場所近辺の利用者をディスターブすることになるかもしれません。したがって、それぞれのグループはできるだけいろいろなポイントへばらまいていくという形にしました。インターネットの検索の場合には完全に一つの部屋を確保して、そこで行うということに気がつけました。

最後のインタビューではこんなことを言った子どもがいました。「私は、将来、図書館司書を目指したい」と。図書館司書の仕事をどのくらい理解できたか知りませんが、こんな仕事もあるんだ、結構おもしろいというふうに思ってくれた子供がいたということです。この言葉は、企画に取り組んだ図書館職員にとっては苦勞がねぎらわれた思いをもったことだろうと思います。

今年度は、明日実行します。それで、明日には私は鹿児島にいる必要があります。今年新しい試みとして、図書館だけではなくて博物館と連携することにしています。これは大学の広報になります。今は何も図書館だけがアピールすればいいのではなくて、大学自身を広報することが必要になっています。鹿児島大学は、幸いにして地方大学には珍しく研究博物館というのができましたので、ここと連携することにしました。今回のタイトルは「探検！発見！大学図書館と博物館」ということで、明日の2時から5時まで行うことになっております。

内容は、昨年そのまま行うのが一番楽ですし、新しいことを行うのは大変ですから、基本的には図書館の行う部分はここに示したとおりです。プログラムは基本的には同じですが、最後に博物館に移動します。博物館には全国の金の産地とか、それなりにおもしろい展示館ですから、そのまま子どもたちに見せて説明するだけですみます。スタンプラリーも基本的には昨年の図書館のプログラムと同じにしております。今年また新しい間を加えて題がさらに加わっていきますと、これから先こういう問題のデータベースができていきます。

最後に、ここに示すグッズ贈呈というのがあります。持ち帰る小物で鹿児島大学との関係の記念にしたいと考えています。

実施にあたってここに示すスケジュールで行ってきました。広報をいつするとかですね。アクセサリ類の調達というのは、お土産用に今年はマウスパッドを使う、博物館が絵はがきを持ってい

ましたのでそれも使ってお土産を準備します。実施直前にはこういうものを袋詰めして、なるだけ満足感を味わってもらおうということでやっております。

最近ある人から勧められました。本省もいろいろやっているから、そのためのパンフレットを結構金をかけてつくっているらしい。そういうものをもらっておいて配布したら、子どもたちにとっていい参考資料になると。来年は本省からそのパンフレットの余りをもらってこようかなと思っております。

終わりに、こういうことをやってくれたのは、図書館の職員たちで、みんな頑張ってくれました。特に、去年の企画はこの3人、今年はこの人たちが中心になって企画してくれまして、初めて実現しました。私自身は、非常にブアな、小さなアイデアしか出さなかったんですが、図書館職員が専門家としての威力を発揮してくれました。その結果、本省の方でも注目してくれたという意味で大変よかったと思います。アイデアを出しても、実際に働く人がなければ、その組織はどうしようもないわけですが、図書館は幸いにして職員一同の協力が得られました。このような立派な研修会で話すような、大げさなことではありませんが、努力してくれた人たちへの一つのお礼にもなるかなと思います。

どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）